福島県の文学	日本文学	県内・国内の歴史
昭和17（1942）、19　富田常雄「姿三四郎」錦城出版社	昭和16	昭和16
〃　18（1943）水原秋桜子「磐梯」甲鳥書林	堀辰雄・菜穂子	対米英宣戦布告
〃　21（1946）東野辺薫「和紙」築地書店	〃18〜23	〃20
宮沢賢治「宮沢賢治歌集」日本書院	谷崎潤一郎・細雪	郡山大空襲、太平洋戦争終戦
〃　22（1947）山本周五郎・二十三年、「糸ぐるま―続日本婦道記」民衆社に収載	〃21	〃21
荒正人「第二の青春」八雲書店	野間宏・暗い絵	日本国憲法公布
〃　23（1948）埴谷雄高「死霊」真善美社	坂口安吾・堕落論	〃22
川内康範「天中軒雲月」積善社	〃22	マッカーサー、2.1ゼネスト中止命令
草野心平「定本蛙」大地書房	原民喜・夏の花	〃23
〃　25（1950）斎藤利雄「橋のある風景」冬芽書房	太宰治・斜陽	帝銀事件　昭和電工事件　福島県文学賞創設
〃　26（1951）田宮虎彦「落城」東京文庫	〃23	〃24
菊田一夫「さくらんぼ大将」宝文館	大岡昇平・俘虜記	平事件
〃　28（1953）大岡昇平・保成峠、「文芸春秋」8月に収載	大仏次郎・帰郷	下山事件・三鷹事件
梁取三義「二等兵物語」彩光社	竹山道雄「ビルマの竪琴」	松川事件
〃　29（1954）井上靖・湖上の兎、「末裔」新潮社に収載	〃24	〃25
三野混沌「阿武隈の雲」昭森社	木下順二・夕鶴	レッドパージ始まる
〃　30（1955）三島由紀夫「沈める滝」中央公論社	〃25	磐梯朝日国立公園指定
金子兜太「少年」風発行所	中村光夫・風俗小説論	〃27
広津和郎「松川裁判」筑摩書房	〃26	福島県歌人会設立
〃　31（1956）志賀直哉・祖父、「志賀直哉全集5」岩波書店に収載	峠三吉「原爆詩集」	メーデー事件
富沢有為男・谷間の太陽、「地上」7〜12月に連載	〃29	〃28
大岡昇平・磐梯愁色、「文芸春秋」1月に収載	中野重治・むらぎも	NHKテレビ本放送開始
臼井吉見「近代文学論争」筑摩書房	福永武彦「草の花」	只見特定地域総合開発計画策定
〃　32（1957）円地文子「女坂」角川書店	三島由紀夫「潮騒」	ラジオ福島開局
富沢有為男「白い壁画」講談社	〃30	〃29
島尾敏雄・いなかぶり、「島の果て」書肆パトリアに収載	椎名麟三・美しい女	造船疑獄で法相、指揮権発動
〃　33（1958）〜34　川内康範「月光仮面」南旺社	石原慎太郎・太陽の季節	自衛隊発足
〃　34（1959）小山いと子「ダムサイト」光書房	〃31	〃31
真尾悦子「たった二人の工場から」未来社	三島由紀夫・金閣寺	水俣病公式に確認
〃　35（1960）城山三郎「黄金峡」中央公論社	石川淳・紫苑物語	〃32
〃　36（1961）山本周五郎「天地静大」講談社	原田康子「挽歌」	東北開発促進法公布
子母沢寛・座頭市物語、「ふところ手帖」中央公論社に収載	〃32	国際ペン大会、東京で開催
昭和37（1962）井上靖・小磐梯、「洪水」新潮社に収載	井上靖・天平の甍	〃33
ノーマン・メイラー・兵士たちの言葉、「ぼく自信のための広告」新潮社に収載	開高健・パニック	狩野川台風
〃　38（1963）舟橋聖一・猫と泉の遠景、「ある女の遠景」講談社に収載	〃33	〃34
〃　40（1965）杉森久英「大風呂敷」毎日新聞社	平野謙「芸術と実生活」	NHK福島テレビ局開局
〃　41（1966）鈴木隆「けんかえれじい」理論社	室生犀星・かげろふの日記遺文	田子倉発電所完工
〃　42（1967）星新一「人民は弱し官吏は強し」文芸春秋社	〃34	伊勢湾台風
戸川幸夫「吾妻の白サル神」国土社	有吉佐和子・紀ノ川	磐梯吾妻スカイライン開通
加藤楸邨「まぼろしの鹿」思潮社	安岡章太郎・海辺の光景	〃35
〃　43（1968）司馬遼太郎「峠」新潮社	〃35	新安保条約強行採決
〃　44（1969）曾野綾子「無名碑」講談社	島尾敏雄・死の棘	〃36
〃　47（1972）小林美代子「繭となった女」講談社	三浦哲郎・忍ぶ川	釜ケ崎で住民暴動
三浦哲郎「まぼろしの橋」文芸春秋社	〃37	〃37
〃　49（1974）早乙女貢「おけい」朝日新聞社	安部公房「砂の女」	第1回福島県芸術祭
吉野せい「洟をたらした神」弥生書房	高橋和巳「悲の器」	
〃　52（1977）田山花袋「棚倉百勝詠歌集」棚倉町町史編さん室		
〃　53（1978）岩間芳樹「流離の女」三笠書房		
〃　54（1979）松本清張「天才画の女」新潮社		
渡辺淳一「遠き落日」角川書店		
〃　55（1980）菅生浩「子守学校」ポプラ社		
〃　58（1983）安岡章太郎「流離譚」新潮社		
〃　59（1984）安岡章太郎「大世紀末サーカス」朝日新聞社		
長田弘「深呼吸の必要」晶文社		
〃　60（1985）早乙女貢「会津士魂」新人物往来社		
〃　61（1986）皆川博子「会津恋い鷹」講談社		
平成1（1989）中村真一郎「蝦崎波響の生涯」新潮社		
〃　2（1990）津村節子「流星雨」岩波書店		

福島県の文学	日本文学	県内・国内の歴史
	昭和38	昭和38
	吉行淳之介・砂の上の植物群	狭山事件
	〃39	最高裁、松川事件で上告棄却、全員無罪確定
	柴田翔・されどわれらが日々	〃39
	〃40	常磐・郡山新産業都市に指定
	小島信夫・抱擁家族	東海道新幹線開業
	〃41	東京オリンピック開催
	遠藤周作「沈黙」	〃43
	丸谷才一「笹まくら」	三億円事件
	井伏鱒二「黒い雨」	〃44
	〃42	東大安田講堂封鎖の全共闘学生検挙
	大江健三郎「万延元年のフットボール」	〃45
	〃44	日本万国博覧会　よど号事件
	清岡卓行・アカシヤの大連	〃46
	〃46	福島第一原発営業運転開始
	倉橋由美子「反悲劇」	〃47
	〃48	浅間山荘事件
	小川国夫「或る聖書」	〃49
	〃50	福島県俳句作家懇話会設立
	檀一雄「火宅の人」	〃51
	〃51	ロッキード献金事件表面化
	村上龍・限りなく透明に近いブルー	〃52
	〃52	福島県現代詩人会設立
	宮本輝・蛍川	〃53
	〃53〜55	福島民報出版文化賞創設　宮城県沖地震
	井上ひさし・吉里吉里人	〃54
	〃54	福島県文化振興基金設立
	中上健次・鳳仙花	〃57
	〃55	東北新幹線開業
	田中康夫・なんとなく、クリスタル	〃59
	〃62	福島県立図書館新築移転　グリコ・森永脅迫事件
	俵万智「サラダ記念日」	〃61
	村上春樹「ノルウェイの森」	8.5豪雨で県下に大被害
		〃63
		青函トンネルと瀬戸大橋開通
		リクルート疑惑発覚
		平成5
		福島空港開港
		会津大学開学

60 二等兵物語

小説　梁取三義　昭和二八年（一九五三）

「戦後の大衆文学の特異な現象は戦争小説の登場」だと荒正人が述べたが、昭和二十八年に出版された小説『二等兵物語』は、その中でも代表的な作品である。有無を言わせず赤紙（召集令状）一枚で一兵卒として軍隊に召集され、無理道理に死地へ赴かせられた庶民にとって本来は否定すべき軍隊なのに、敗戦で消滅すると階級制や暴力によって人間性を奪った世界が一種のなつかしさで思い出される。それを描いている。主人公古山源吉二等兵は会津若松の連隊に入営した。「私たちは不思議な感激に身を振るわせながら東部二十四部隊の営門の前に整列した。」（会津白虎隊発祥の地、鶴ヶ城下である」と描いている。これは映画化され東北出身の俳優伴淳三郎のユーモラスな演技で観客を集めた。現在、若松には連隊の営門だけが残っている。

78 丹下左膳

小説　林不忘　昭和二年（一九二七）

「この風のごとき浪士丹下左膳、じつは、江戸の東北七十六里、奥州中村六万石、相馬大膳亮（たいぜんのすけ）殿の家臣が、主君の秘命をおびて府内へ潜入している仮りの相（すがた）であった」。名刀乾雲坤竜を奪取するために、密かに江戸に放たれた片眼片腕の怪剣士。彼が行くところ争乱の嵐を呼び、血の雨が降る。名刀をようやく手に入れ、片恋の娘弥生と共に左膳は藩主の待つ相馬の松川浦へと船出したが―。この作品は最初『新版大岡政談』の題で発表。大河内伝次郎等名演の映画も人気を博し、相馬市には巨大な丹下左膳の碑も建てられた。

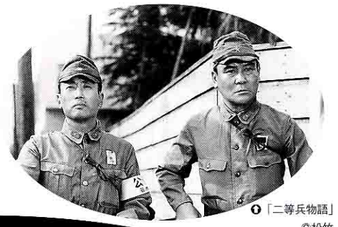
83 相馬の仇討

小説　直木三十五　大正一三年（一九二四）

母と密通し父を殺害した憎っくき仇、九郎右衛門を追って清十郎たちは菅薬の行商をしながら磐城相馬郡へやって来た。「相馬原町へきた江戸の講釈師、牧牛舎梅林、可成りの入りだが、今高座で軍記物を読んでゐる四十近い、芸名久松喜遊次といふ男、講釈師より遊人といつた名だから勿論前座だが、締つた読み調子」。実はこの喜遊次こそ九郎右衛門の世を忍ぶ姿、原町の広場で大勢の見物のなか、清十郎たちはみごとに父の無念を晴らした。作者が得意とした仇討ちシリーズの一篇で、千葉亀雄『新版日本仇討』にも同様の話が載っている。

「月光仮面」©東映

「丹下左膳」©松竹



「二等兵物語」©松竹

「姿三四郎」©東宝

90 東海遊侠伝

伝記　天田愚庵　明治一七年（一八八四）

愚庵は平藩士の次男として生れたが、戊辰戦争で父母らが行方不明となり、所在を求めて全国を放浪、山岡鉄舟門下となり、二五歳の時、鉄舟の世話で清水の侠客次郎長にあずけられ、かわいがられた。当時次郎長は侠客から足を洗い、社会事業家となっており、明治一四年には養子として入籍、山本五郎となった。そこで次郎長についての見聞をまとめたのが本書である。

次郎長一家の大政、小政、森の石松らの活劇を描いたこの作品は、水滸伝ばりの名文で、その後の次郎長物語の種本となった。当時の衆議院議長大岡育造の序、成島柳北校閲となっており、結尾には両親らの尋ね人広告も掲載されている。昭和五二年いわき民報社が復刻版を出している。

95 天中軒雲月・月光仮面

小説　昭和三三年（一九四八）・昭和三三（一九五八）　川内康範

月よりの使者、正義の味方月光仮面。白いマフラーとマントをひるがえし、オートバイでさっそうと登場して悪を撃つ。日本版スーパーマンとして昭和三三年からテレビに登場してお茶の間の人気を独占。さらに桑田次郎画の同名漫画も子供たちの夢と勇気をかきたて、月光仮面ごっこが大流行したが、実は両方ともに原作者は川内康範だ。彼は実在の女性浪曲師を描いた『天中軒雲月』という小説で、第一回の福島県文学賞を受賞している。

梁取三義（やなとり・みつよし）
明治四三（一九一〇）・八・一五～平成九（一九九七）・九・一九。本名、光義。筆名に二義の他に彩国義夫、牧村真帽。南会津郡只見町生。『花咲く真理』『大地に明る』『小説啄木』等がある。

林　不忘（はやし・ふぼう）
明治三二（一八九九）・一・一～昭和一〇（一九三五）・九・一。新潟県生。他に、谷崎次、牧逢馬のペンネームを使い分け、古典の豊かな素養をうかがわせる快い名文で大衆小説を多作。

直木三十五（なおき・さんじゅうご）
明治一四（一八八一）・一・一～昭和九（一九三四）・二・二。「南国太平記」など多くの作品で、大衆小説の向上に貢献。没後、その業績を記念して直木賞が制定された。

天田愚庵（あまた・ぐあん）
安政元・七・二〇～明治三七・一・一七。磐城国生。漢学及び国学を修め、剛毅な精神の持主だが、繊細な歌心も有し、落合直文、正岡子規らと交遊。晩年には山家し愚庵と号し、京都伏見に庵を結び、万葉調の秀歌を残した。この庵はいわき市松ケ岡公園に移築されている。

川内康範（かわうち・こうはん）
大正九・一・二六～、北海道生。終戦後二年間ほど、いわき市に居住し文芸同人誌「文学」を発行。近代に入っては、「月光仮面」の作者として、また、「天中軒雲月」等の作詞者として、また、「月よりの使者」等の作詞者として、また、「月よりも君を愛す」「伊勢佐木町ブルース」等が大ヒット。